

前回は、私たちの苦しみを主（イエス）も分かち合っていてくださるということ。また、ミツの人生は私たちに、現在の自分を見直す問いを突きつけているということを書きました。

ミツはその短い生涯を閉じました。その死は、私たちに何を語っているのでしょうか。きょうは私たちにとって「死」とはどんな意味をもっているのかを考えてみたいと思います。

### 《遠藤氏はなぜ、ミツの死という結末を書いたのか》

『わたしが・棄てた・女』は、ミツの死という結末を迎えました。第16回でご紹介したように、ミツのモデルになった井深八重さんは、看護婦となってハンセン病患者の人たちのために92年の生涯を捧げました。しかし、遠藤さんはミツにあまりにも短い一生を与えたのです。なぜでしょう？

それは、「死」というだれにでも訪れ、絶対に避けることができない現実とその意味をふかく考えてほしいという遠藤さんの私たちに對する〈宿題〉ではないでしょうか。

また、『あたしは、神さまがなぜ壮ちゃんみたいな小さな子供まで苦しませるのか、わかかんないもん。子供たちをいじめるのは、いけないことだもん』。

『なぜ、悪いこともしない人に、こんな苦しみがあるの。病院の患者さんたち、みんないい人なのに』というミツの問いに對する〈答〉を、私たちに考えぬいてほしいからでもあると思います。

ひとりの人間の死は、その人が人生で苦勞を重ねながら積みあげてきた家族や仲間との絆、成功や業績、地位や財産などすべてを奪い去ってしまうかのように思えます。そのとき私たちは人生のはかなさや、この世における人間の営みのもろさを痛感させられます。しかし、「死ですべてが終わってしまう」のでしょうか？ 何も残さず…？ 神から与えられた人間の〈いのち〉は、そんなものではない…と信じるのがキリスト者です。

### 《「小さな死」とは…》

わたしの親友のお姉さんは、学校事務の仕事を全うして定年退職を迎えました。その数年後、病を得ました。病巣が胸から数か所に転移し、ご家族の看病の甲斐なく帰天されました。友人から聞いた話によると、「なぜ、わたしなの？」「これまで悪い事なんか、してこなかったのに…。どうして？」と、繰り返しておっしゃっていたといいます。ハンセン病と診断された時のミツも同じ言葉を口にしたことを覚えていらっしゃるでしょう。病気や事故、そして死は、前触れもなく私たちを襲います。しかし「なぜ？」と、その不条理を問う人間に答えることはありません。

2009年の上智大学・夏期神学講習会は「死と再生」というテーマで開催されました。

ホアン・アイダル師（上智大学神学部准教授）は「人間はそれについて自分がまったく知らないものを恐れる。〈向こう側〉に何があるかわかっていけば恐れない。死は突然現れるものではなく、いのちあるところには、かならず死がはたらいている。その〈小さな死〉を出発点にして考えることが大切」とおっしゃいました。

〈小さな死〉とはなんでしょう。〈死〉という言葉に抵抗を感じる方がいらっしゃれば、〈別れ〉に置きかえてもいいと思います。たとえば、あなたのこれまでの人生のあゆみを考えてみてください。

現在、共働きの夫婦がたくさんいらっしゃいます。1歳（あるいはその前の生後数か月）で保育園に子どもを預けるご家庭もあるでしょう。わたしの長男の二人の子ども（6か月半と2歳）も、この5月から保育園に通いはじめました。初めの数日間は送ってきた母親と離れる不安で、2歳の子は泣きじゃくり、0歳の子は保育士さんが与えるミルクを飲むのをいやがりました。幼い子どもにとっては、それまでずっとそばにいてくれた母親が、半日以上いないわけですから一大事です。聞きなれた優しい声も聞こえず、あたたかく抱きしめてくれた手も胸もありません。それまでの毎日の安らぎが奪われ、もし孫たちが話すことができたなら、「ママ、どうしてボクをおいていっちゃうの？」とブーブー文句を言うでしょうネ。新しい環境、先生方、友だち…。まったくちがった空間に放り込まれるわけですから無理もありません。さいわいにも孫たちは、1週間かからずに適応できたようです。両親も、じい・ばあもホッと胸をなでおろしました。孫たちにとっては初めての〈小さな死＝別れ〉と言えるでしょう。

保育園・幼稚園から小学校に入学するときも、それまでの友だちの数人と別れて、新しい仲間に出会います。やさしかった園の先生方と比べて、多少きびしい学校の先生が目の前に現れます。遊び中心だった生活は、こくご・さんすう・りか・しゃかいなど「勉強」もしなくてはなりません。給食当番やおそうじもあります。学校がおわれば、「宿題」があります。塾に通う子もいるでしょう。それまでとはまったくちがう世界に入るわけです。そして中学校～高校～…と、別れと出会いをくり返します。別れは新しい出会いのための〈門〉とも言えます。

第8回で書きましたが、わたしは高校から東京に出ました。まさに「別世界」でした。同級生はすべて知らない友だち。会話のきっかけをつくるのにも苦労しました。あのときほど、両親や小・中の親友が身近にいてくれるありがたさを感じたことはありませんでした。また、下宿をしていたので、その家のおじさん・おばさん・3人のお子さんたちとも初めての出会い。伝えたいこと・お願いも遠慮がち。バスと電車での通学時のラッシュアワー経験。押しつぶされるかと思いました。しかし、〈ひとり〉になったおかげで、新しい世界にめぐり逢うことができました（詳しくは第8回参照）。

その後も、予備校～大学～就職～結婚～二人の息子の親に～一般中学校3校・特別支援学校3校への赴任～二人の息子の結婚～退職～…と、いくつかの〈小さな死〉を経験しました。それは、自分が包まれていた家族のぬくもりや、仲間との絆・友情…などを一時的に手放すことでもありました。でもそれは、たくさんの新しい仲間（家族・同僚）・生徒たちとの出会いでもあり、人生の喜び・悩みを共有し、人として成長する機会を与えてくれました。〈新しい門〉が開かれたのです。

ヘンリー J.M. ナウエン師 (1932-1996 オランダ生まれ、カトリック司祭。ノートルダム大・イエール大・ハーバード大などで教鞭をとり、カナダのラルシュ・コミュニティの牧者としても約 10 年間生活した。) も、〈小さな死〉ということばを使い、『小さな死と接するごとに命と出会うのです。それは、手放すことを学ばせてくれます。それまでに慣れ親しんだものとは違った人生を発見する備えをさせてくれます』と書いています。そして『死とは、真の人間になるために通るたくさんの門のうちの最後の門』であるといえます。

〔おことわり〕 本来ならここで、〈死〉についてさらに書く必要があるのですが、キリスト教信仰の中心である〈イエスの死と復活〉について詳しくお話ししなければなりません。多くのページを割くこととなります。ということは、『わたしが・棄てた・女』からしばらく離れることになってしまいます。そこで、この物語に沿ったお話が終了したあと、あらためて書きたいと思います。それまでしばらくお待ちください。

### 『手の首のアザ』(五) (p.216~235)

吉岡は、長い間手紙を見つめていました。そしてビルの屋上から曇り空の下の景色や人々の姿を見ながら、『数えきれない人生のなかで、ぼくのミツにしたようなことは、男なら誰だって一度は経験することだ。ぼくだけではない筈だ。』と自分に言いきかせます。第6回で書いた〈みんな〉の中に自分を閉じ込めることによって、自分を正当化しようとし、ところがここで、ひとつの思いが彼を捉えます。

『しかし … しかし、この寂しさは、一体どこから来るのだろう。ぼくは今、小さいが手がたい幸福がある。その幸福を、ぼくはミツとの記憶のために、棄てようとは思わない。しかし、この寂しさはどこからくるのだろう』。吉岡は〈寂しさ〉という言葉をくり返します。そして、それが〈どこから〉くるのか考え始めます。

『もし、ミツがぼくに何か教えたとするならば、それは、ぼくらの人生をたった一度でも横切るものは、そこに消すことのできぬ痕跡を残すということなのか。寂しさは、その痕跡からくるのだろうか』。

『そして亦、もし、この修道女が信じている、神というものが本当にあるならば、神はそうした痕跡を通して、ぼくらに話しかけるのか。しかしこの寂しさは何処からくるのだろうか』。

吉岡は、この疑問に対するひとつの〈答らしきもの〉を探し出しました。「人生を一度でも横切るものは、なにかしらの〈痕跡〉を残すのではないか」。遠藤氏は「もの」と平仮名で書いていますが、これを「者」(人間)と置き換えることもできるでしょう。

今回は、吉岡とともにミツが残した〈痕跡〉の意味を考えていきましょう。

【引用・参考にした書籍】 ・遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』

・ヘンリー J.M. ナウエン 『最大の贈りもの 死と介護についての黙想』(聖公会出版、2003) ・ホアン・アイダル『死の恐怖と他者の発見』(宮本久雄・武田なほみ編著『死と再生 2009 年上智大学神学部 夏期神学講習会講演集』(日本キリスト教団出版局、2010)